

日本近海産ハダカイワシ属魚類の 和名についての提唱

川口 弘一

Japanese Common Names of the Lanternfishes of the Genus *Diaphus* (Family Myctophidae)

Kouichi Kawaguchi

(Received March 12, 1979)

Based on recent studies on the taxonomy and distribution of the fishes of the genus *Diaphus*, the scientific names of several species have been changed and a considerable number of species has been recently recorded in Japanese waters. To prevent confusion due to these taxonomical changes, the combinations between the scientific names and the Japanese common names are discussed for 10 species hitherto known to the Japanese fauna. Furthermore, new Japanese common names are presented for 19 species including four species which had not been previously recorded off Japan, but are safely assumed to occur there due to the transportation by the Kuroshio Current.

(Ocean Research Institute, University of Tokyo, Minamidai, Nakano-ku, Tokyo 164, Japan)

日本近海産のハダカイワシ属魚類の研究は Jordan and Starks (1904) や Gilbert (1913) により始められ、以後の日本人研究者の研究もこの線に沿って進められている。松原 (1955) はそれまで日本近海から報告のある種として8種をあげている(但し、ハクトウハダカ属 *Labianchia* の1種をのぞく)。以後丸山 (1970) がトドハダカ *D. theta*, Kawaguchi and Nafpaktitis (1978) がクロシオハダカ (*D. kuroshio*) を加えている。しかしこれらの研究にも拘らずハダカイワシ属の分類学的混乱は解消されるに到らなかった。これらの事情は、ハダカイワシ属魚類の分類の確立にはある特定海域からの標本だけでなく、全世界からの標本の比較検討が必要であることを示している。

近年 Nafpaktitis (1968, 1973, 1974, 1978) は、全世界の海洋からの標本に基づく一連の研究を行い本属魚類の分類学は大きく前進した。これらの知見をふまえて、Kawaguchi and Shimizu (1978) は、西部太平洋、東部インド洋および東南アジア海域に出現するハダカイ

ワシ属魚類の分類と地理分布に関する報告を行った。これによると既知の10種(但し、ドントウハダカ, *D. agassizi* は、15. ハナレハダカの幼魚と考えられるので除く)を含む25種のハダカイワシ属魚類が日本近海より出現することが明らかとなり、またいくつかの学名変更がなされた。これに伴い学名一和名一標本の間に若干の混乱が生じる恐れが生じた。そこで日本近海産の25種に黒潮と関連して出現する可能性の強い熱帯・亜熱帯性の4種 (*D. diadematus*, *D. diademophilus*, *D. lucidus*, *D. problematicus*) を加え、29種の和名についての考察と提唱を行った。なお未出現の4種については、新和名の右肩に星印を付し他と区別した。種の配列は学名のアルファベット順とした。なお以下に示す学名一和名に対応する標本は、すべて東京大学海洋研究所、東京大学総合研究資料館、高知大学文理学部に所蔵されている (Kawaguchi and Shimizu, 1978)。なお日本近海からは、上記の種の他に Kulikova (1969), Parin et al. (1977) によるハダカイワシ属魚類の報告があるが、ここでは混乱をさけるために標本が実際に手もとにあり、確認の出来たもののみを扱ったことをお断りしておく。

1. メハダカ *Diaphus adenomus* Gilbert, 1905

本和名は、*D. anteorbitalis* につけられたが、これが *D. adenomus* の同種異名であることが明らかにされた (Nafpaktitis, 1974)。眼前発光器 Suo が眼の前上縁と前下縁を縁取るように伸び、眼の輪郭を明瞭にしていることからメハダカとつけたと思われる。

2. ニラミハダカ (新称)

Diaphus aliciae Fowler, 1934

眼が大きく、横長の楕円形をし、レンズの前方紅彩との間に大きな空間 (aphakic space) があり、横眼を使って睨んでいるような感じがあることから“ニラミ”とつけた。なおこのような特徴は、発光器 So をもつ他の種にも見られ、とくに本種に固有なものでない。

3. フタボシハダカ (新称)

Diaphus anderseni Tåning, 1932

眼の周辺にある2つの発光器 Dn と So がほぼ同じ大きさ又は So の方がやや大きく、よく目立つことから“フタボシ”と名づけた。

4. エビスハダカ (新称)

Diaphus brachycephalus Tåning, 1928

本種は、体高が著しく高くかつ尾柄が短く、全体としてずんぐりした印象を与えるので、“エビス”という名をつけた。本種の近似種に熱帯性の *D. richardsoni* がおり、南支那海の 17°N 附近まで出現する。

5. シラタマハダカ* (新称)

Diaphus diadematus Tåning, 1932

本種の成熟した雄の発光器 Vn は、眼の下に大きく発達し、その白さが体の暗色に対比して非常に印象的なので“シラタマ”という語を冠した。

6. ホクロハダカ* (新称)

Diaphus diademophilus Nafpaktitis, 1978

眼の下縁にある、ほぼ円形をした発光器 Vn に因んで“ホクロ”と名づけた。

7. クマドリハダカ (新称)

Diaphus fragilis Tåning, 1928

ハダカイワシ属魚類は、一般に眼の前縁が黒色の模様組織で縁取られていることが多いが、本種ではとくにこれが発達している。この眼前の縁取りを役者の隈取りに見たてて、クマドリハダカと名づけた。

8. コビトハダカ *Diaphus fulgens* (Brauer, 1904)

松原 (1955) により示されたハダカイワシ属魚類各種への検索法は、Parr (1928) に依っている。この検索によると日本近海に出現する2種の区別が不可能となる。そのひとつは Nafpaktitis (1978) により定義が明確にされた *D. fulgens* であり、他は Kawaguchi and Nafpaktitis (1978) により記載された *D. kuroshio* である。日本近海における後者の出現頻度は、前者に比べ著しく高いので、従来コビトハダカ (*D. fulgens*) として同定された標本の多くは *D. kuroshio* であった可能性が強い。ここでは、*D. kuroshio* に比べ *D. fulgens* の方が小型の種であること、また従来コビトハダカ=*D. fulgens* という組み合わせが使いならされてきていることを考慮して *D. fulgens* にコビトハダカ、*D. kuroshio* にクロシオハダカという和名をつけるのが適当と考える。

9. ヒロハダカ *Diaphus garmani* Gilbert, 1906

本種は、太平洋、インド洋、大西洋に分布し、その形質に見られる地理変異の幅もかなり広い。かつて日本近海のもの、*D. latus*、フィリピン近海のもの、*D. ashmeadi* と報告されていた。

10. スイトウハダカ *Diaphus gigas* Gilbert, 1913

松原 (1955) は、本種を *D. elucens* の同種異名としている。しかし *D. elucens* は本種と区別可能な種で、Nafpaktitis (1978) により *D. perspicilatus* (19. シロハナハダカの項参照) の同種異名とされている。Parr (1928) に基づく松原 (1955) の検索では、上記2種の区別が不可能である。したがって従来両種が混同されてきた可能性がある。しかし *D. gigas* の出現頻度が相模湾、駿河湾などを中心とした陸棚縁辺の近海で高いのに対し、*D. perspicilatus* は、黒潮を中心とした外洋域に

出現する。従来の採集報告の多くが近海域に限られていたことを考慮すると、これまでスイトウハダカと報告されて来た種の大部分は、*D. gigas* と推定される。そこで *D. gigas* に従来使われていたスイトウハダカという和名を付した。なお本種は、シロハナハダカ (*D. perspicilatus*) が生息環境の不適により成熟を停止し、巨大化 (gigantism) したのではないかとの説もあるが、確たる証拠はまだない。

11. チビハダカ (新称)

Diaphus jenseni Tåning, 1932

本種は標準体長 30 mm 前後で成熟する熱帯性の小型種で、“チビ”という語もそれに因んだ。最大体長は 50 mm に達する。

12. クロシオハダカ *Diaphus kuroshio*

Kawaguchi et Nafpaktitis, 1978

本種の生物量が黒潮とその隣接海域に多いことから Kawaguchi and Nafpaktitis (1978) によりクロシオハダカと名づけられた。

13. カンムリハダカ* (新称)

Diaphus lucidus (Goode et Bean, 1896)

本種の眼前発光器 Dn は、大きく発達し、その背縁は眼窩上縁より高位である。この Dn を前頭部にのった“カンムリ”に見たてた命名である。

14. ガンテンハダカ (新称)

Diaphus luetkeni (Brauer, 1904)

眼の周囲の発光器 Vn の背縁、つまり眼窩の下縁に沿って丸い微小発光器が4~5個並んでいる。このような点状発光器列は、本種に固有なので、それに因んでガンテンハダカと名づけた。

15. ハナレハダカ *Diaphus malayanus* Weber, 1913

ハナレハダカは、*D. tanakae* (松原, 1955 では *D. tanakai*) に付けられた和名であるが、*D. tanakae* が *D. malayanus* の同種異名と考えられるので、*D. malayanus* の和名に変更した。

16. ダイコクハダカ (新称)

Diaphus metopoclampus (Cocco, 1829)

体高、頭高が高く、全体にづんぐりした体形が特徴なので、“ダイコク”という語を冠した。

17. ツクシハダカ (新称)

Diaphus nielsenii Nafpaktitis, 1978

本種は、ハダカイワシ属魚類の中では、体形がきわめて長細い。この長細い感じを東海大学の久保田正氏が“ツクシ”と表現されたのをそのまま拝借した。

18. チカメハダカ (新称)

Diaphus parri Tåning, 1932

ハダカイワシ科魚類は、一般に眼が大きい方が、その中でも本種は大きい方に属し、眼鏡をかけているように見えるという意味で“チカメ”という語を使った。

19. シロハナハダカ (新称)

Diphus perspicilatus (Ogilby, 1898)

本種は、従来 *D. elucens* として世界の外洋から報告されて来たが、近年 Nafpaktitis (1978) により *D. perspicilatus* の同種異和であることが明らかにされた。眼前発光器 Vn, Dn がよく発達し、吻端部全体が白くみえるので、シロハナハダカと命名した。(10. スイトウハダカの項参照)。

20. チギレハダカ (新称)

Diaphus phillipsi Fowler, 1934

本種は、尾柄部がちぎれたように短く、体形全体が寸詰りの印象を与えるのでチギレハダカと命名した。

21. マヨイハダカ* (新称)

Diaphus problematicus Parr, 1928

Parr (1928) により記載された種で、学名にハダカイワシ属分類の悩ましさがよく表現されている。そこでマヨイハダカと名付けた。

22. アガリハダカ (新称)

Diaphus regani Tåning, 1932

本種の臀鰭後部発光器列 AOp の最後の2~3個は後方に行くにつれて高位になっている。これは、ハダカイワシ属魚類の中で本種にのみ見られる特徴である。“アガリ”とはこの AOp の特徴ある配列を表わしている。

23. サガミハダカ

Diaphus sagamiensis Gilbert, 1913

学名に由来する和名である。近似種に *D. chryso-rhynchus* が居り、ハワイ沖から報告されている。

24. タカハダカ (新称)

Diaphus schmidti Tåning, 1932

本種の体側発光器 PLO, SAO₃ および Pol は、ともに著しく高位で側線に接している。本属魚類の中で、このような高位の発光器の配置をもつ種は極めて珍しいので、“タカ”という語をつけた。

25. ボウハダカ (新称)

Diaphus signatus Gilbert, 1908

体形が著しく長細いことから、ボウハダカと命名した。

26. ツノハダカ (新称)

Diaphus splendidus (Brauer, 1904)

眼窩前上縁に前方に向かって小棘が一本あるのに因み、ツノハダカとした。これは本種に固有な形態的特徴である。Jordan et al. (1913) は、本種にゴクラクイワシを提唱しているが(1)本種に固有な大きな特徴を和名にと

り入れた方が記憶に便利なこと(2)ハダカイワシ属魚類の和名の語尾を——ハダカに統一した方が便利なこと(3)ゴクラクイワシが松原(1955)にもとり入れられておらず殆ど一般に知られていないこと等を考慮してあえて和名変更を行った。

27. センハダカ *Diaphus suborbitalis* Weber, 1913

本和名は、*D. glandulifer* という学名の意味をとったものであるが、これが *D. suborbitalis* の同種異名であることが明らかにされた(WISNER, 1974)。本種の上部体側発光器 PLO, VLO, SAO₃, Pol, Prc₄ などに附属する発光腺は、日本近海に出現する本属魚類の中で本種だけに見られる特徴である。センハダカとはこの発光腺に因んで付けられた和名である。

28. トドハダカ *Diaphus theta*

Eigenmann et Eigenmann, 1890

典型的な亜寒帯・寒帯性の種であり、丸山(1970)が、やはり同じような海域に生息する海産哺乳類トドに因み命名した。上野(1971)によるトガリハダカ(*D. prototulus*)は、本種の同種異名である。

29. ハダカイワシ *Diaphus watasei*

Jordan et Starks, 1904

Nafpaktitis (1978) により、*D. watasei* と近似種 *D. coeruleus* の区別点が明確にされた。従来の日本近海からの *D. coeruleus* の報告の多くは、この区別点を明確に示していない。しかし少くとも岡田等(1935)や蒲原(1950)によって報告された *D. coeruleus* は、その図から判断して *D. watasei* である。一方日本近海からの *D. coeruleus* に該当する記載のある報告はまだない。また筆者のこれまでの調査においても、日本近海に *D. coeruleus* が出現するという証拠は得られていない。つまり従来日本近海より *D. watasei* 又は *D. coeruleus* として報告されてきた標本は、*D. watasei* である可能性が強い。そこで *D. watasei* の和名として、ハダカイワシを用いることを提唱する。

引用文献

- Brauer, A. 1904. Die Gattung Myctophum. Zool. Anz., 28(1): 377~404, figs. 1~9.
 Cocco, A. 1829. Sudi alcuni pesce de' mari di Messina. G. Sci. Lett. Sicilia, No. 77. Palermo (7)26(77): 138~147. (not seen).
 Eigenmann, C. H. and R. S. Eigenmann. 1890. Additions to the fauna of San Diego. Proc. California Acad. Sci., Ser. 2, 3: 1~24.
 Fowler, H. W. 1934. Descriptions of new fishes obtained 1907 to 1910, chiefly in the Philippine Islands and adjacent seas. Proc. Acad. Nat.

- Sci. Philadelphia, 85: 233~367, figs. 1~117.
- Gilbert, C. H. 1905. The deep-sea fishes. In: The Aquatic resources of the Hawaiian Islands. Bull. U. S. Fish Comm., (1903) 23 part 2: 575~713, figs. 1~276.
- Gilbert, C. H. 1906. Certain scopelids in the collection of the museum of comparative zoology. Bull. Mus. Comp. Zool. Harvard Univ., 46(14): 255~262.
- Gilbert, C. H. 1908. Reports on the scientific results of the expedition to the tropical Pacific, etc. X. The lantern fishes. Mem. Mus. Comp. Zool. Harvard Univ., 26(6): 217~238, pls. 1~6.
- Gilbert, C. H. 1913. The lantern-fishes of Japan. Mem. Carnegie Mus., 6(2): 67~107, pls. 1~4.
- Goode, G. B. and T. H. Bean. 1896. Oceanic ichthyology. Spec. Bull. U. S. Nat. Mus., 2 vols. Text 553 pp., atlas 123 pls.
- Jordan, D. S. and E. C. Starks. 1904. List of fishes dredged by the steamer Albatross off the coast of Japan in the summer of 1900, with descriptions of new species and a review of the Japanese Macrouridae. U. S. Fish. Comm. Bull., 1902, 22: 577~628, figs. 1~53, pls. 1~8.
- Jordan, D. S., S. Tanaka and J. O. Snyder. 1913. A catalogue of the fishes of Japan. Jr. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo, 33(1) 1~497, figs. 1~396.
- 蒲原稔治. 1950. 土佐及び紀州の魚類. 288+44+26頁, 220図, 高知県文教協会.
- Kawaguchi, K. and B. G. Nafpaktitis. 1978. A new lanternfish, *Diaphus kuroshio* (Family Myctophidae), from the Kuroshio waters off Japan. Japan. J. Ichthyol., 25(2): 79~81, figs. 1~2.
- Kawaguchi, K. and H. Shimizu. 1978. Taxonomy and distribution of the lanternfishes, genus *Diaphus* (Pisces, Myctophidae) in the western Pacific, eastern Indian Oceans and the Southeast Asian Seas. Bull. Ocean Res. Inst. Univ. Tokyo, (10): 1~145, figs. 1~56.
- Kulikova, E. B. 1961. On the lantern fishes of the genus *Diaphus* (Scopelidae) from the western Pacific Ocean. Trud. Inst. Okeanol. Moskva, 43 (Ichthyology): 5~39, 27 figs. (English translation, no. 61, Bureau of Comm. Fisher. Lab., U. S. Nat. Mus.).
- 丸山 潔. 1970. 東北地方深海産魚類, 東北海区水産研究所報告. 第30号, 43~66, 21図.
- 松原喜代松. 1955. 魚類の形態と検索 I~III. 1605頁, 536図, 135図版. 石崎書店, 東京.
- Nafpaktitis, B. G. 1968. Taxonomy and distribution of the lanternfishes, genera *Labianchia* and *Diaphus*, in the North Atlantic. Dana-Report (73): 1~131, figs. 1~69, pls. 1~2.
- Nafpaktitis, B. G. 1973. A review of the lanternfishes (Family Myctophidae) described by A. V. Tåning. Dana-Report (83): 1~46, figs. 1~44.
- Nafpaktitis, B. G. 1974. A new record and a new species of lanternfish, genus *Diaphus* (Family Myctophidae) from the North Atlantic Ocean. Los Angeles Co. Mus. (Nat. His.) Contrib. in Sci., (254): 1~6, figs. 1~2.
- Nafpaktitis, B. G. 1978. Systematics and distribution of lanternfishes of the genera *Labianchia* and *Diaphus* (Myctophidae) in the Indian Ocean. Sci. Bull. Nat. Hist. Mus. Los Angeles County (30): 1~92, figs. 1~82.
- Ogilby, J. D. 1898. New genera and species of fishes. Proc. Linn. Soc. N. South wales, 23 Pt. 1(89): 32~41.
- 岡田彌一郎, 内田恵太郎, 松原喜代松. 1935. 日本魚類図説. 425+46頁, 166図版. 三省堂, 東京.
- Parin, N. V., V. E. Becker, O. D. Borodulina, E. S. Karmovskaya, B. I. Fedoryako, Y. N. Shcherbachev, G. N. Pokhilskaya and V. M. Tchuvasov. 1977. Midwater fishes in the Western Tropical Pacific Ocean and the seas of Indo-Australian Archipelago. Trud. Inst. Okeanol., Moskva 107: 68~188, 42 figs.
- Parr, A. E. 1928. Deepsea fishes of the order inimi from the waters around the Bahama and Bermuda Islands. Bull. Bingham Oceanogr. Coll., 3(3): 1~193, figs. 1~43.
- Tåning, A. V. 1928. Synopsis of the scopelids in the North Atlantic. Vidensk. Medd. fra Dansk naturh. Foren. Bd. 86: 49~69, figs. 1~2.
- Tåning, A. V. 1932. Notes on scopelids from the Dana expedition. Vidensk. Medd. fra Dansk naturh. Foren., Bd. 94: 126~146, figs. 1~6.
- 上野達治. 1971. 北海道近海産魚類目録. 北海道水産試験場報告. (13): 61~102.
- Weber, M. 1913. Die fische der Siboga-Expedition. Siboga-Exped. Rep., 57: 1~710, figs. 1~123, pls. 1~12.
- Wisner, R. L. 1974. Descriptions of five new species of myctophid fishes from the Pacific, Indian, and Atlantic Oceans. Occas. Pap. California Acad. Sci., (110): 1~37, figs. 1~8.

(164 東京都中野区南台 1-15-1 東京大学海洋研究所)